

## 英語の 'it' と日本語の「それ」

上 村 和 也

### ま え が き

私は昨年の本紀要で中世英語の翻訳を試みた。それは私にあらためて英語と日本語の相違点・類似点をいろいろな側面や事象のもとに知らせてくれる契機となった。コンマ (comma) やコロンの (colon) その他の英語の句読点 (punctuation marks) は如何にして訳語に表わすものだろうかといった細かな問題から Goethe をゲーテと書くか、ギョオテ (鳩外)<sup>1)</sup> と書くかといった問題に端的に現われている固有名詞の表記の問題、'and' とか 'but' 等の頻出する接続詞をどううまく処理するかという問題、主語中心の言語と述語中心の言語の相違、例えばある人が I love a fool という Charles Lamb のことばを「愚人を愛す」ではなく、「われ愚人を愛す」と訳して英語の持ち味が幾分出せたと思ったというようなことにもかかわってくる問題、語順の相違の問題、ひいては文学を生み出す文化の相違という問題等々翻訳にあたって考慮しうる事柄は多い。以下の論考は、それらの問題を意識しながらも、これといった考えもなく頭を悩ましていた過程で生まれた一つの問題をとりあげ、私なりに考えてみようとするものである。

### 1

話しの糸口をごくごく卑近なところに求めて、そこに問題を発見して検討することから、この考察を始めてみたいと思う。

人間は言語を持たないならば人間とは言い得ないであろうが、英語をその言語に持ち人間としての生活を営んでいる人々の用いていることばを読んだり聞いたりしていると、it とか that とかの指示詞が頻出するのに気付くものである。気付くというよりは、むしろ、あまりに頻出の度合いが多くて、それに気付くためには、ことばを話したり聞いたり、読んだり書いたりする現実の言語の場から一歩心持ちの上で退いてみななければならないというほどのことでもあろうか。言語の現実の場で一般的に出てくる場合の it、例えば、Of course, the greatest festival of the English and European winter is Christmas. *It* is a time of childlike emotions and childlike extravagance<sup>2)</sup>に見られる it は、あらゆる種類の英語の文章や話しことばの中に、時・所を問わず出てくるものであることはいまさら改めて述べるまでもないことである。もしこういった it が現実の英語に無かったとしたなら

ば、英語の文章や話しことばは今のものとはよほど異なった印象を与え、きわめて unwieldy な smart でないことばになっていたことであろう。それは丁度いわゆる Modern English に慣れた目や耳に、また Modern English を研究するもの目や耳に、Old English が何かぎこちなくぶかっこうなものに思えるというのと一脈相通ずるものであろう。事實は勿論 unwieldy ということはなく、it なる指示詞は厳然として英語の中に存在しているのである。そして Old English は Modern English に発展して来た。<sup>(3)</sup>私は敢えて「発展した」といっておきたいと思う。

ところでこの it を日本語に翻訳するとすればどうなるのであろうか。英語を学んだ常識から考えれば‘それ’とか‘あれ’とかになるだろうと予想されるのであるが、と同時に、英語には that なる指示詞もあって、それも‘それ’とか‘あれ’とかの訳語で説明すると大抵の場合は間に合うということも、われわれ英語を学んだものの常識として知っているということも無視出来ない事実である。とすれば、it も that も日本語になる場合は同じものになるのであろうか。両者は区別する必要はないものであろうか。あるいは区別出来ない特殊な事情があるのではなからうか。そして、それは言語の本質的な問題として、人間の認識や思考の構造にまでかかわってくるのではないであらうか。より具体的な問題をあげれば、‘That’s it’ というような英語の表現のなかではけっして珍らしいものだとはいえない語法などは、一般的辞書の知識をふまえて‘それはそれである’と訳してみても、日常使われる普通の日本語としてはほとんど意味をなさないものになってしまう。いったいこれは言語のあり方や構造の点からどうゆう理解をしておいたらよいのであろうか。日本語の‘それ’、‘あれ’などの指示詞と英語の‘it’、‘that’との関係はどうなっていると理解しておいたらよいのであろうか。

以下はその点に関して私が目下考えていることを率直に述べようとするものである。

## 2

この論考を進めてゆくために、it についての用法を概括的にでも一応述べておく必要があると思ふ。that に関しては it よりもはるかに指示詞としての用法は単純であり、その点特にここに述べる必要はないであらう。勿論 it との関係でその相違するところの本質的側面には後でふれるつもりである。

### It の用法

1. Situation ‘it’<sup>(4)</sup> (環境の it) : 一定の先行詞は受けないが、何を受けるかは環境・文脈から判断出来るもの。

(1) 主語としての用法

Who is *it*?      *It* is John.

*It* is the boys, isn't *it*?

(2) 述語としての用法

In a lilac sun-bonnet she was *it*. (彼女がライラック色の日よけボンネットをかぶった姿は天下一品だった)

In the dance, *it* is grace. (*it* = the important thing)

cf. 『英語学辞典』は語順が逆になっていると説明するが、いずれでも意味上変りないことに *it* の特殊性があるというべきであろう。

(3) 動詞・前置詞の目的語としての用法

He lords *it* over his inferiors. (彼は目下の者にいばり散らす)

I had a good time of *it*.

2. Preparatory 'it' <sup>(5)</sup> (予備の *it*): Anticipatory (or provisional, formal) 'it' ともいう。後に来る語句や節を指示して前に立つ *it*。

(1) 主語としての用法

イ (動) 名詞を指示する場合

*It* was very funny the way in which the penguins used to waddle.

*It* is no use crying over spilt milk.

ロ 'To'-infinitive を指示する場合

*It* rests with you to decide.

*It* is not good for a man to be alone.

ハ 'That'-clause を指示する場合

*It* is a thousand pities that it should have come to this.

How is *it* that you are late?

*It* is under such circumstances that one recognizes one's true friends.

ニ 疑問詞 (感嘆詞) 又は whether に導かれる clause を指示する場合

*It* has been asked where and when he went.

*It* is strange how often he met her there.

ホ 「It + (代) 名詞 (相当語句) + 関係代名詞」の場合

*It* is a good divine that follows his own instructions.

*It* is you that are guilty.

*It* is not who rules us that is important but how he rules us.

(2) 目的語としての用法

You must find *it* rather dull living here all alone by yourself.

I make *it* a rule to go out for a walk at five.

I took *it* for granted that he would not come.

3. Impersonal 'it' (非人称の it) : いわゆる非人称動詞 (Impersonal verb) や非人称的叙述 (Impersonal statement) の主語として用いられるもの。

*It* rains cats and dogs.

What time is *it* by your watch?

*It* is a long way to the sea.

4. Anaphoric 'it' 最も普通の用法で、すでに話題になった物や人や生き物を指すのに用いる。

He took a stone and threw *it*.

What's that noise? *It's* the dog.

以上 *it* の用法をきわめて単純で明確な形で説明した。*it* の用法の輪郭をその明晰な概念のもとに提示しておきたいと思ったからである。したがって *It took me three months to finish the work* の *it* は *to finish the work* の形式主語 (Formal subject) か、あるいはいわゆる非人称の *it* (Impersonal 'it') かという問題に代表して見られるいわば *it* の用法の分類・区分の正確さを追求する問題にはふれないことにした。それは、それでまた興味ある問題かとも思うが目下のわたしの考察はそれらの分類・区分を越えた *it* に関するより広い一般的な本質・要素を見出し、*it* に新たな光をあてることによって *it* の特殊な重要性ということの意味をあらためてさぐるのが目的だからである。そこで這般の目的を達成するために *it* の用法を以下の2つにまず大別して論を展開してゆきたいと思う。私はそれらを (1) 物理的 *it* (Physical 'it') と (2) 心理的 *it* (Psychological 'it') と呼ぶことにしておきたい。

- (1) 物理的 *it* : この *it* は、先の Situation 'it' と語句の表現上誤解されやすいのではないかと思うが、この *it* には Situation 'it' は含まれない。Situation 'it' は、私の分類ではむしろ心理的 *it* ということになる。この物理的 *it* というのは、言語の場の中におけることばということに視点を置き、発話されたことばの context に現実に表現されているものをうけて *it* が使われる場合のことをいうのである。したがって、*There is a book on the table. It is mine* という場合の文の *it* は *a book* という現実に表わされたことばをうけてそれを *it* と表現する場合のような単純なものから前の文章の中の主語や目的語や修飾語の中の語や語句などをうけて用いる *it* のみならず、*It follows that he is honest* というような、いわゆる Preparatory 'it' といわれるものも、*it* を説明するものが *that* 以下に (ということは現実の文中に)、表現されているのでこの物理的 *it* に属するものとする。すなわちこの物理的 *it* は、代名詞の普

通の用法である前に述べられている語や語句をうけて 'それ' という場合と Preparatory 'it' とを同じ性格・種類のものとするようになる。この点には特に注意をうながしておきたいと思う。

- (2) 心理的 it (Psychological 'it') : この it は、物理的 it の場合とは反対に it が指示すべき事物や人が現実の文の中に表わされていない場合で、しかもその指示物は聞き手・読者の心に具体的なイメージとして浮かび、それと理解出来るようなある種の共通の言語の場が存在していると想定出来る時に用いられるものである。したがって先の Situation 'it' はこれに相当する。またいわゆる Impersonal 'it', 例えば *It is three miles to Chicago* の it などはこの心理的 it に入れることになる。この it はことばの発話がなされる以前に、あるいはそれが成り立つ前提条件としてすでに言語の場が存在していると仮定される時にのみ用いられるのである。

以上 it の用法を二つに大別してみたのであるが、その上でさらに次のような例をもとにもう少し考察を深めてみたいと思う。

- (1) Run for *it* (逃げ出す) の *it* は (*Idiomatic and Syntactic English Dictionary*) によれば, 「after prepositions, the meaning depending upon the context」と説明した後で for *it* は for our purpose, e.g. for safety, to catch our train だと書いている。とすれば先の Psychological 'it' とわたしが規定した *it* も「その意味はコンテキストによる」(the meaning depending upon the context) とも言いうるということになる。ということになれば、私の物理的 *it* と心理的 *it* という区分も単なる一つの分類というほどになるかと思う。それはさらに次のような種々の *it* の持つ側面・姿態を考慮に入れるとすれば一段と納得できる思いで、もう少し多岐にわたる *it* の姿をカバーする何かほかの理論を立ててみたい気持ちになってくる。

- (2) I did not know *it* was you standing there.

(Preparatory 'it' か Situation 'it' か? 即ち, Physical 'it' か Psychological 'it' か?  
以下皆同じ)

- (3) If *it* were not for your help, I would not try to solve the question.

(Preparatory 'it' か Situation 'it' か?)

- (4) *It* was the first time that such a privilege had been accorded him.

(Preparatory 'it' か Impersonal 'it' か?)

- (5) *It* seems that there is going to be a change.

(Preparatory 'it' か Impersonal 'it' か?)

私はそこで *it* の説明をあらたな観点から以下のように述べてみたいと思う。

*it* は話者と聴者の関係が成立することばの場のなかにあつて、すでに口から発された(あるいは口に出そうと意図する)語や語句を指示するか、あるいは、実際に口で表現された(あるいは表

現しようとする) 語や語句が存在しない時でも話者と聴者の心にそれと分かる事物や人や動物を指示するものとして用いられる。口で実際に表現された語や語句が存在しない場合でも話者と聴者の心にそれと分かるということの意味は、両者の間に会話が始まる以前からすでにことばの場というものが存在しているということが暗々裡に了解出来ているということの意味する。そうであるから How is *it* with you? という場合その話者は、聴者との間に *it* を理解出来ることばの場が存在するものと期待し、また聴者を信頼して安心してことばを聴者に投げかけるのであるが、その時には思想の交流を保証するような、ことばを成り立たせる共通の場が必然的に前提されているのである。There is a book on the table. *It* is mine という時の '*it*' が There is a book on the table というコンテキスト、すなわち本の存在の現実を背景にすることば(あるいはことばの場)が存在してはじめて用いられるように、How is *it* with you? の *it* は、その場が歴史的・習慣的に形成されているから理解出来るのである。*it* には歴史が宿っている。話者と聴者の伝達の共通の場を前提にする故に、*it* には社会がある。*it* を用いる時には、そこに用いるものの側の心に、無意識のうちにも相手との間に対話をおこなうのに必須の共通の場を作りあげようとする力が働いているのではなからうか。話者と聴者の精神的交流を深めてゆこうとする積極的志向を持った、ことばの立体的重層的展開の端緒というべきものを作り上げているのではなからうか。それは文字通りのことば(思想)の立体的・重層的端緒である。端緒であるから現実を *it* ということばで切りとってくる時の切り取り方は、一面的で瞬間的で選択的であることが多い。「それ」 *it* と先ず表わしておいてもし必要あれば後からゆっくり説明したらいいという心理から生まれるのである。Preparatory '*it*' などはこうゆう心理から出てくる。まず共通の場の設定が先だ、対話に対して prepare する必要があるというのであろう。そういう点からは、Preparatory '*it*' にしても Formal object としての *it* にしてもそれと照応する不定詞にしても動名詞にしても that その他の類似の語が導びく節 (clause) などはずべて *it* の補語(あるいは補語的)と考えるべきものであろう。それは *It was they that were to blame.* のような構文の場合も同様である。であるから普通の用法である前述のもの(名詞)をうけてそれを「それ」と指示する場合の Anaphoric '*it*' は、後に補語となるような説明を必要としないでそれ自体で完結しているに過ぎないといった程度のもではなからうか。事物(名詞)に照明をあてて照らし出し浮き立たせるのに事物全体に光をあてたといったものであろう。そしてその部分部分のいろいろ異なった側面に光をあてるというのが *it* の種々の用法を生んでいると考えるべきではなからうか。

*It* に関してはもう一つ話者と聴者の心理的・空間的距離という観点からの問題がある。

Russell は彼の著書<sup>(6)</sup>の中で Egocentric Particulars という用語を用いて this, that, I, you, here, there, now, then, past, present, future などとその意味が話者との関係によっ

て決まってくるものとして説明している。I-now（今の私）を基盤にしてのみ意味の正確な指示が出来るというのである。これ（this）といってもそれは私（I）から見ての「これ」であり他者からは「それ」となるものである。その意味では that は明らかにこの Egocentric Particulars の一つである。ところが it はそうではない。it は話者を聴者が定まってからはじめてその意味（it の指示する事物）がわかるというものではなく、話者と聴者の等距離に位置するものである。話者と聴者の区別を意識したことばの場に現われるものではなくて、話者と聴者を越えた共通の場にあられるものである。that を主観点・自己中心的（ego-centric）というとなれば、it は客観的・非自己中心的（non-egocentric）ということがいえるであろう。

ところでこのように変り身に富んだ、多様な含蓄のある用法が日本語の「それ」にあるであろうか。勿論「否」である。「それ」はあくまで、「それ」（that）であり、自己中心的である。「それ」はいわゆる「コソアド」体系における遠称・中称・近称という各名称自身が示しているように、自己（話者）を中心とした距離であらわされている体系の中に位置する、又それ以外に位置づけの方法がないものであろう。近称は中称を意識し中称は遠称を意識しというようにこの三つの指示詞は相互意識的存在である。即ちこれらの指示詞の真の意味を知るためには、Russell のいわゆる I-now（今の私）という軸を定める必要があるが、それが存在しうるのはことばの場の中においてのみであり、その意味で I-now（‘I’も‘now’も‘this’を用いて説明しうるものであるが）を軸にしてのみ意味を持ちうる指示詞もことばの場に附着しそこからぬけ出しえない。ことばの場をあくまでも匍匐するのみで it のようにそこから飛翔しえない。「それ」が‘it’のように匍匐するのみで飛翔しえないことにも日本語の膠着語としての特性が表われているというべきであろうか。なるほど「コソアド」体系の中の中称の「それ」などは一見‘it’にあたるものであるように思われる。実際便宜的には大変役に立つものではある。しかし本質的には言語の層の違いというべきものであろう。となれば it にあたるものは日本語にはないのであろうか。また他動物から人間を区別する言語としてそういうことがありえるのであろうか。

*(To be concluded.)*

- 注 (1) Goethe の研究家の星野慎一氏によれば Goethe には40余りの表記の仕方があるという。  
(GAKUTO Vol. 70, No. 5, MARUZEN CO., LTD.)
- (2) James Kirkup, *English Customs and Festivals*, p.73, 成美堂, 昭和48年  
この引用文は最近著者が読んだ手もとにある講読用のテキストからとってきたものである。この論考においても引用文それ自体は論旨には直接関係はない。権威ある文法書や辞典等からとって来てもよいものである。また、実際その方がよりよい場合もある。(筆者も it の用法の概括的な説明をしたところの引用文は『英語学辞典』(研究社)の中からとってきたものが多い。若干書きかえたところもあるけれども) 引用文その自体の目新しさ・独創性を出す必要のない問題だからである。それにもかかわらず、筆者自身が目にしたものをなるべく引用しようとしたのは、ほかに適切な引用文がないか、または単なる筆者の好みによるものである。
- (3) L.Kellner は彼の著書 (*Historical Outlines of English Syntax*, p.7, 研究社) の中で、Old English の文体の特徴は、「文章の構造における均整と統一の不在」(the absence of proportion and unity in the structure of the sentence) であり、その syntax は natural で *naïf* であると述べ、それが歴史の流れとともに natural, concrete から artificial, abstract な表現へと発展した旨を述べた後、次のように言う。「Striking instances of this change are offered by the development of the article a (an), and the, from what was originally a numeral and a demonstrative pronoun.」この指摘はそれ自体として私にはきわめて興味深いものであるが、「Striking instances of this change」の中にさらに一つ ‘it’ の誕生という英語文体上の革命的とも言える事実を加えるべきであると思う。なお ‘it’ の OE 時代における人称代名詞 3 人称単数の中性 hit (hyt) から現在までの歴史的発達とその意義に関しては別の機会に新たな論考を試みるつもりである。
- (4) Curme の用語 (*Syntax*, p.7, Maruzen Asian Edition, 昭和34年)
- (5) Jespersen の用語 (*Essentials of English Grammar*, p.154, George Allen and Unwin Limited.)
- (6) Bertrand Russell : *An Inquiry into Meaning and Truth*, p.102, (Pelican Books, 1962)
- (7) 『日本語の特質』(育英書院, 昭和16年)の著者佐久間鼎は、「コソアド」体形に類する整然たるものがヨーロッパ諸国語(勿論英語もその一つである)の指す語にはないことを述べた後で、『大抵は、「中称」に当るやうなもの、第二列の「ソ」の系列に該当するやうなものをもってゐません。そんなところからヨーロッパの近世語では、この種の語詞の重要性とその語法上の地位とがはっきり認められませんでした』(同書, 253 ページ)と断定して、日本語のヨーロッパ諸国語に対する優位性・長所を主張しているように思われる。わたしは、英語に

上村：英語の 'it' と日本語の「それ」

は「ソ」系列のものはないという事は認めるものであるが、優位性・長所云々の問題は、英語には日本語にない 'it' という指示詞のあることの意義が十分検討・認識された後にはじめて問われなければならないと思う。

[受理 1974. 10. 19]